

評傳チャールズ・ラム

評傳
チャールズ・ラム

福原麟太郎著作集
4

福原麟太郎著作集 4

評傳チャールズ・ラム

昭和四十三年十二月二十日 印刷
昭和四十三年十二月二十五日 發行

定価 一、三〇〇円

著者 福原麟太郎

発行者 小酒井益蔵

印刷者 小酒井益三郎

印刷所 研究社印刷株式会社

発行所 研究社出版株式会社

便郵番号一六二

東京都新宿区神楽坂一の二

電話東京(六六)四五二一(代表)

振替東京 八三七六一

(乱丁・落丁本はお取替え致します)

目次

チャールズ・ラムをめぐつて

ラムの「萬愚節」……………	三
エッセイについて……………	九
ラムについて……………	一六
典型的な英国人……………	二三
C・L・小照……………	三五
チャールズ・ラム——青年……………	五〇
ラム——一八二一—二二年……………	五四
ワーズワスとラム……………	六三
ロンドン・ラブソデー……………	六九

目次

『エリア随筆後集』……………	六
中間情緒——ラムの演劇論……………	七
幸福なラム……………	一〇
『エリア随筆集』……………	一〇
岡倉先生とラム……………	一四
随筆の誘い……………	一六

チャールズ・ラム傳

ラムのすべて——序に代えて……………	一五
第一章 テンプルでの生い立ち……………	一四
第二章 文学青年……………	一四
第三章 人生模様……………	一八
第四章 『エリア随筆集』……………	二〇
第五章 古なじみの顔……………	二六

第六章	ペントンヴィル……………	三〇八
第七章	『シェイクスピア物語』……………	三一九
第八章	『劇詩人名作抄』……………	三二三
第九章	花ようやく開く……………	三六七
第十章	洒落と酒……………	三八三
第十一章	不惑に達したラム……………	三九七
第十二章	恋をするラム……………	四一八
第十三章	運の高みに立つ……………	四三三
第十四章	ラムの世界……………	四四六
第十五章	『エリア随筆後集』……………	四六九
第十六章	修羅の太鼓……………	四九七
第十七章	消えかかった燈火……………	五二一
チャールズ・ラム書目……………		五二六
一 本邦文献……………		五三六

目次

二	ラムの本の思い出	五三四
三	終りに	五四一
	あとがき	五四五
	掲載紙誌一覧表	五五四

チャールズ・ラム肖像・原稿 対一五四

チャールズ・ラムをめぐって

ラムの「萬愚節」

愚かなことが人間の人間らしいところである、そこに何とも言えぬ泪ぐましさがある、*fellow-feeling* が生れる、というふうに考える——というよりもむしろ感じるものが出来る人はラムの *'All Fools' Day'* が解る人でありましょう。解るといふよりも同感しうるといった方がよいかも知れません。ラムは愚かさを持っている友が安心な友であるとか、一矢の愚かさを持っているくないものは一貫目のもっと悪いものを持っているのだとかいうような事を言つて、ふざけております。しかしふざけているようでもその底には、しみじみとした人間いとしの情が含まれていることをわれわれは切に感じるのであります。実際「萬愚節」は読みはじめからふざけております。途中に至ると故事由来の因縁話で、われわれ日本人には煩わしいほどの引用や伝説や来歴で満ちております。しかしそれをだんだん読んでいって末尾に至ると、さすがに名手の筆、*Humanity* の泪でくもった目に微笑を泛べて書いたエッセイであることを感じさせないでは置きません。そして私どもも本当に人間の愚かさをいとおしく思い、それでこそわれわれは一つの人間という名でつながれているのだ、

道ばたの物乞いも、台閣の大臣も、かぶと町で相場に血眼になっている人も、また私どものように外国の本を読んで日々の烟を立てているものも、等しく兄弟姉妹である事を感じしめられるのであります。

「萬愚節」の始まりは、

The compliments of the season to my worthy masters, and a merry first April to us all.
旦那方へは季節の御挨拶。われらには四月朔日喜びあれ。

というパラグラフであります。次は、

いくよろづ代と今日めでたく皆々様方の上に返りますよう——あなた様にも——あなたにも——あなた様にも、おっと——そ、そんなに苦い顔をするもんじゃありませんやね、え、こんな事で仏頂面なんかにする所じゃありませんぜ。

それからラム先生は言うのであります——

お互に知らない間柄じゃなしさ。何も儀式張らなくなつて良きさ。われわれは皆それ、あいつを少しばかりは持っているのだから。——あれをね——道化の性を少しはね。こんな吉日に際して、世間大方の御祭に

さ、つんと澄しているような連中には、神罪たちどころに当りたまえ。

私の訳文は、すこし酔っぱらいのようでしょうか。しかしちょっと訳して見たくなるような文章であります。それから一、二行飛んで突然、

He that meets me in the forest to-day, shall meet with no wise-acre, I can tell him.

という文に出くわします。これは本当に突然であります。何の事だか判らない。そこで恐る恐る註釈を見ますとシェイクスピアの *As You Like It* の中の文句をもじったのだとあります。ここでシェイクスピアから出ている、しかも『お氣に召すまま』から出ている文句に見当がつかなかったと白状するのは、名にし負う『英語研究』に一枚看板で買われて来た愚生のはなはだ恥とするところであります。しかし知らない事は知らないのだから致し方がない。するとまた突然続けざまに知らないラテン語が出て来ます。

Stultus sum

また註釈を見ます。I am a fool という意味だとの事。そしてラムはそれに追っかぶせて、

これを翻訳したまえ、して、御苦勞賃にその意味は貴公に進呈。

これでは、てきめん過ぎて痛いともかゆいとも言えなくなります。ぽかんと一つ肩外しを喰った体であります。

それからラムはグズベリの酒をなみなみと盃に注いで、『お氣に召すまま』の中にある尻取り唄をうたいます。そして、さてこれから正史の正道を検討して、世に名だたる大馬鹿者を列挙して見ようではないかと大きく出て、

ああ君、帽子をすこしどけてくれたまえ、御願いだ。拙者の賢明なる御面相がかくれて見えない恐れがある。

と大道商人のような口上。それからまた一くさり唄があつて、さて世界の大馬鹿ものの列伝であります。

第一はエムペドクレス——これは羽化登仙の名を得ようと思つて秘かにエトナ火山の噴火口へ飛び込んだが、履いていた赤いスリッパが飛び出して来て人目に触れたので、命がけの羽化登仙伝説の創造に失敗したという、紀元四世紀のギリシャ哲学者であります。

次はクレオムプロタス、次はゲービア、次はアレクサンダー、それから小説中の人物になつて

Mister Adam, これはフィールディングの『ジョウゼフ・アンドルーズ』中に出てくる坊さんであります。(それも皆註釈を見て知ったんだらうと言うのは誰だ。)云々云々といろいろあります。ダンス・スコータスも出て来ればフォールスタフも出て来ます。草疲れたところでまた唄がいくさり、また出てくるのはゲイの『乞食のオペラ』に登場するマクヒースという泥棒であります。そしてラムもさすがに種が尽きたか、その文章の終りは星印****で、ここで列伝が終ります。

そして言うのであります。あまり長話をしていると四月の二日になってしまふ。二日は馬鹿ものについて語るに適当な日ではない。「そこで真実偽りのない処を白状いたしますれば拙者は馬鹿が好きです。まるで馬鹿の親類みたいに好きです。」

このエッセイを読んでいる人はここへ来てはつとするのであります。巧みな転換であります。ラムの人情と悟りに不意に捕まえられてしまふのであります。

それからラムは聖書マタイ伝の中にある五人の愚かな女が燈火の油を切らした話だの、砂の上に家を建てた話だの、タレント金を預って、預ったままに藏って置いた男の話だのを持ち出して、そういう愚かな人の方に私は無量の同感と愛着を感じるのですと、今度はしみじみ申し述べます。そしてこの稿の始めに記したように、愚かな者について感想をばふざけ気味に披瀝しながら、言葉を結んで、

チャールズ・ラムをめぐって

へ

Reader, if you wrest my words beyond their fair construction, it is you, and not I, that are the *April Fool*.

読者よ。もし拙者の言葉をその正当なる意味以上に曲解したまわば、四月馬鹿の名を負うものは、拙者にあらずして、実に貴殿に御座りまするぞ。

と誌して筆を置いております。読者諸君よ。もしこの拙者の文章を読んで、正当なる意味以上に……恐惶謹言。

エッセイについて

エッセイ、訳して随筆という。しかし随筆というと、つれづれ草のようなもの、枕草紙のようなものばかりを考えられても困るし、『文芸春秋』の巻頭の随感随想記のようなものだと思われてもいけないから、エッセイと英語のままで言うのであるが、英文学の学生にとって、エッセイというのは特殊な一つの表現形式であって、ただでたために形の無いものではない。また短い感想文というのでもなければ、何々の説などという倫理的こじつけでもない。思ひ出であることもあるが事実が重要ではない。理屈をいうこともあるが理論が大切なのではない。とりとめもなき話のようで纏まりがある。身の上話だと思って聞いていると、存外それは人間の運命の物語である。

しかし、それがまた英文学のエッセイ全体に当てはまるわけではない。まずそれはチャールズ・ラムに出でてチャールズ・ラムに帰る。ラムの随筆がそういうものであるので、それが標準である。ラムの好きな人が、英国のエッセイというのはそういうものだという事になっている。しかしラムにもいろいろあって、無闇にふざけているのもあれば、馬鹿にセンチメンタルなのもある。そ

んなのはラムの氣紛れだということにして、良いものだけを選ぶ。ラム文学という抽象的な空氣が出来上る。そこでエッセイとはこんなものということになる。今日のいわゆる隨筆とすこし違ったものである。

明治三十年に『文芸俱樂部』が増刊として、『柳北全集』を出している。それをばらばらめくっていたら、面白カラズノ雪という「雜文」が出て来た。こういうのがエッセイの雛型である。すこし長いが全文を転写してみる。

雪月花トテ古來雅人ノ賞翫スル所ナレドモ、一口ニ概シテ面白キモノトハ謂ヒ難シ、時トシテ殊ニ面白ク思フコト無キニ有ラネド、ソノ一生ニ幾回有ル可キヤ、中々以テ容易ニハ遭ヒ難キナリ、漁史ガ四十七年ノ間ニ於テ雪ノ景色ノ面白キト思ヒシハ唯ダ二回ノミナリ、明治ノ初メニヤ有ケン、正月ノ中旬雪降リシ日、亡友安田運驪・桂川月池ノ兩人ヲ伴ヒ、柳橋ヨリ舟ニ乘リ名妓三名美酒一樽ヲ携ヘテ柳島ニ遊ビタリシニ、雪ノ景色殊ニ面白カリシ、此ノ遊ビハ兩才子三人有テ故サラニ情景ヲ添タルモノカ、前後ニ此ノ快樂ハ無カリシナリ、其後仏朗西ニ航シ巴里ニ寓居セシ時ニ、岩倉大使ノ一行着セラレタリ、旧友ノ陪行セシ者多カリシ故、一日微雪ヲ衝キ大使ノ旅宿ニ赴キタリ、晚餐後四方山ノ物語リニ刻ヲ移シ、二時比ニ馬車ヲ馳セテ我が寓ニ歸リシ途中、飛雪粉々タルニ街上ノ瓦斯燈ハ光ヲ放チテ白昼ノ如ク、深夜ナレバ人行モ絶エ、四望醜々トシテ玉ヲ鋪クガ如ク、セイヌ河ノ辺リナドハ得モ言ハレヌ風景ナリシ、斯カル奇絶ノ景色ハ再ビ看ルコトヲ得ントモ思ハレズ、此ノ二回ガ漁史ノ雪ニ於テ今ニ忘レヌ程ノ快事ナリ、其他ハ平々凡々、或ハ苦案